

石を抱くエネリマン (5)

濱野京子

夏目尚吾・絵

〈前号のあらすじ〉

文化祭の「原発」展示も無事終了。いよいよ受験に向けて時間は加速する。志望校決定。入試。そして三月十日、県立高校の合格発表。未だ将来の夢がみつからぬあたしを含め、全員行き先が決まる。翌十一日、偉生は合格祝いに祖母が買ってくれる携帯で最初に姉さんにメールすると約束し、祖父母の家へ泊まりに行った。

その時のことを思い出すと、一カ月以上がたった今も、心拍数があがってくる。

新しい制服で高校に通い、新しい環境の中で新しい友達としたり、たわいのないことに笑うこともある。けれどふとした瞬間、自分がどこにいるのかわからなくなるように頼りなく、足下がぐらぐら揺れているような錯覚に陥る。

